
孤独な子爵

森野 莓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な子爵

【Nコード】

N7924Y

【作者名】

森野 莓

【あらすじ】

コートニー子爵は、独身貴族だ。愛想も財産もない男が見つけた本当の幸せとは。

コートニー子爵は、不幸な生い立ちのせいで、愛想のない青年だった。さらに付け加えれば、財産もなかった。爵位持ちなので、まったく女性にもてないわけではなかったが、結婚を仄めかした女性は一人もいなかった。子爵の灰色の瞳は冷酷そのものだったので、女性達は子爵に見つめられると、虫けらにでもなったかのような気分にはさせられた。金も愛情も持たない男を愛するほど愚かではない女性達は次々と子爵の元を去った。当然のことながら、子爵が彼女達を追いかけることはなかった。年齢不相応な厳めしい顔つきをした青年が抱える孤独に気付く者はいなかった。かつて自分を心から理解してくれる人間がいたことを子爵は忘れていた。不幸な生い立ちのせいで、鎧を纏った心が彼に忘れたふりをさせた。

肌寒い季節になると、子爵はコーヒーが飲みたくなった。帰宅途中に立ち寄ったコーヒーハウスの入り口で、子爵は一人の女性とすれ違った。女性がコーヒーハウスにいるのは、珍しいことだったので、何気なく視線を向けると、怯えた目とかち合った。子爵は、逃げるようにして立ち去った女性の後ろ姿を眺めながら、見覚えのある目だと思った。夜会か、舞踏会か。いや、もっと前だ。大学時代かもしれない。月並みな表現かもしれないが、大学時代は子爵にとって最も輝かしい時代だった。子爵には、人生で初めてというべき、親友がいたのだ。名前は、フレデリック。ウイリントン男爵家の長男だった。

フレデリック・ウイリントンは、研究の合同発表者として、何気なく子爵の前に現れた。フレデリックは、南の野蛮な大陸で育ったという噂通りの外見をした青年だった。身長は子爵よりも頭ひとつ分低く、焦げ茶色のくしゃくしゃ頭で、棒きれのように細い手足をしていて、頬にそばかすが散らばり、首元には時代遅れのクラバットが巻かれていた。甲高い声は少年のようで、それを気にしてい

るのか、ほとんど口を利かないので、子爵と同じ位愛想のない人間だと思われていた。無口だが、優秀な二人は、最低限の打ち合わせだけで研究発表を終えた。それで縁は切れるはずだったが、祝杯をするために行った酒場で運命は変わった。ウイスキーを飲んでいたフレデリックが突然けらけらと笑い出した。

「とうとう酒に手を出したわけだ。今の僕なら、何でもできるぞ。」
日ごろ飲まないアルコールのせいだろう。子爵は、フレデリックの言葉を聞いて、にやりと笑った。

「言ったな、ウィンストン。では、何かひとつしてもらおうか。そうだな。外を歩いている御婦人がいるだろう。そう、あの黄色い日傘をさした女性だ。彼女を笑わせて、あの日傘を手に入れることはできるだろうか。」

「お安い御用さ。10分つてところかな。」

フレデリックは、はしばみ色の目をおどけたようにぐるりと回すと、ウイスキーをぐいっとひっかけ立て上がった。子爵は、フレデリックの言葉を信用していなかった。目当ての女性はかなりの美人だ。醜い小男が話しかけたところで、歯牙にもかけないだろう。子爵は、狼狽する級友の姿を想像しながら、窓の外を眺めていた。不思議なことが起きた。フレデリックに声を掛けられた女性は、初めこそ不審そうな表情だったが、5分もたたない内にクスクスと笑い始めた。きっかり10分後、フレデリックは、黄色い日傘を手にとって酒場に帰ってきた。

「どこの店で買ってきたんだ。」

子爵は、苦虫を噛み潰したような顔で黄色い傘とフレデリックを見比べた。

「その目で一部始終を見ていただろう。」
フレデリックは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。友人が好きな女性にプロポーズしようとしている。友人の故郷では、黄色い日傘の下でプロポーズすると、恋人達は必ず幸せになれるという言い伝えがあって、どうしても黄色い日傘が必要なのだ。フレデリックは、

そう言つて頼み込んだらしい。

「女性は、ロマンチックな他人事が大好きなんだよ。」

「随分、女を知っている口ぶりだな。」

「まあね。」

フレデリックは、日傘の下に顔を隠してしまった。扇の下に本心を隠す女性のように。

その後、子爵とフレデリックの距離は急速に縮まっていった。友情というのは、相手を尊敬した時に生まれるものらしい。実際、フレデリックには、尊敬すべき点がたくさんあった。女性に詳しいだけでなく、父親の仕事で世界中を旅してきたフレデリックは子爵の知らない世界を教えてくれた。子爵の方は、孤独を癒すために買い集めた大量の本の中から選りすぐりをフレデリックに貸してやった。長い間押し込められてきた愛情を一身に注がれて、嫌いになれる者がいるだろうか。

「僕は、君が大好きだよ。」

卒業式の日、フレデリックにそう言われて、子爵は嬉しかった。愛しているという言葉は友人に対してもなかなか使えるものではない。「私も君が好きだ。一番の親友だと思っている。」

気の利いた台詞は言えないが、フレデリックなら自分の気持ちを分かってくれると思った。しかし、本音を言った気恥かしさを我慢して顔を上げた子爵の見たものは、怯えたような目だった。怯えではなく、悲しみだろうか。そんな違いも気付かせないほどの一瞬だった。フレデリックは、につこりと笑った。

「ありがとう。君に親友だと言ってもらえる自分を誇りに思うよ。」

「今生の別れみたいな言い方だな。」

「しばらく会えないんだ。南の大陸に戻って、父の事業を手伝うつもりだからね。その後は、結婚するんだ。」

フレデリックが発した結婚という言葉は、なぜか子爵の耳に不愉快に響いた。

「急がずとも、独身を楽しむのも悪くないと思う。」

「そういうわけにもいかないよ。」

フレデリックは淋しそうに言った。子爵は、小さな違和感を惜別の感傷としてかたづけた。

「では、帰国したら、連絡をくれ。結婚式に呼ぶのを忘れるんじゃないぞ。」

二人は、笑顔で別れた。短くて半年、長くても一年。それだけ待てば、親友の声を聞くことができると思っていた。しかし、フレデリックから連絡がくることはなかった。南の大陸から帰ってきたという噂を聞くこともなかった。やがて、子爵は、深い孤独の沼に再び沈み込んでいった。フレデリックのことを思い出すことはなかった。あの目を見るまでは。

甦った記憶は現在と繋がる。直感としか言いようがなかった。その直感は、親友を失った喪失感を埋めるために多くの女性と付き合うことで得たものなのかもしれない。思い返してみれば、兆候はいくつもあった。小さな手。高い声。他人を拒絶するような態度や首に巻かれたクラバットは、全ては秘密を守るためだった。「大好きだよ。」とフレデリックは言った。自分を愛していると。あの目に映っていたのは、怯えではなく、悲しみだったのだ。5年前の自分を張り倒してやりたい。どうして、あの目を忘れていたのだろう。なぜ、気づいてやれなかったのだろう。結婚すると言っていた。もう人妻なのだろうか。そんなことかまうものか。

コーヒーハウスを飛び出したコートニー子爵は人混みの中をやみくもに走り回った。焦げ茶色の髪を子爵は必死に探した。見つけた。馬車に乗り込もうとしている。

「フレデリック！フレデリック・ウィリンストン！」

子爵は、自分がこんなに大きな声を出せるとは知らなかった。いや、フレデリックと一緒にいた頃はよく大きな声を出して笑っていた。馬車に乗り込もうとしていた女性が真っ青な顔をしている。はしばみ色の瞳は、驚きと恐怖で、大きく見開かれていた。子爵は大腿で馬車に歩み寄ると、女性を引っ張り下ろして、抱き締めた。

「会いたかった。ずっと君に会いたくてたまらなかった。」

子爵の胸の中で女性は肩を震わせて泣いた。嘘をついてごめんなさい。信賴を裏切ってごめんなさい。傷つけてごめんなさい。謝罪は、何度も繰り返された。姿こそ別人だが、中身は昔のフレデリックのままだった。友情に誠実であるうとするあまり、何も言わずに子爵の元を去ったフレデリックのままだった。子爵の胸は、女性の涙でびしょ濡れだったが、そのずっと奥の方は温かった。冷え切った心は溶かされていた。

フレデリック・ウイリンストンは、無責任な男で、ウイリンストン男爵にとって、頭痛の種だった。男爵は、役に立たない長男に期待するより、娘のダイアナを伯爵と結婚させれば、男爵家の事業は安泰だと考えたが、ダイアナは抵抗した。元々大学に行きたかったダイアナは、大学に行かずに世界を放浪している兄の名義で、大学に入った。卒業後に伯爵と結婚することが交換条件だった。馬鹿げた考えだと男爵は思っていた。しかし、いざ大学を卒業してみると、ダイアナに想像以上の事業の才能があることが発覚した。男爵といえども、父親だ。意に沿わない結婚を強いるよりはダイアナの思い通りにさせてやりたい。結局、男爵は、思いきってダイアナを後継ぎに据えてみることに決めた。決断は間違っていなかった。ダイアナは生き生きと働き、男爵家の事業は拡大している。もうすぐ孫も生まれる。初孫の父親は、財産こそ少ないが、有能な男だ。なにによりも、ダイアナとの仲が良い。まるで、親友のように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7924y/>

孤独な子爵

2011年11月23日17時51分発行